

もはや米国が圧倒的なパワーを背景に、世界を牽引する時代は終わつたのかもしれない。それでも、米国の動向はわれわれに多大な影響を及ぼす。新型コロナやウクライナ戦争など、世界が試練の時を迎える中、バイデン政権はいかなる外交を展開するのか。第一線で活躍する研究者たちが、バイデン政権の世界観を紐解き、米外交の行方を占う。内政と外交の接点に光を当てる論考が多く、米国を突き動かすダイナミズムが理解できる。

分断修復を唱えた大統領 その苦闘を多角的に評価



バイデンのアメリカ
その世界観と外交
佐橋亮／鈴木一人・編
東京大学出版会／2750円

核拡散や軍拡、INF条約の破棄の流れに、核抑止を禁止する核兵器禁止条約は歯止めになるか。核抑止が安全保障の大核を担う現状で、核軍縮国と核兵器国との対立を激化させているだけではないのか？ 本書では、ジュネーブ軍縮代表部大使を務めた著者が、核兵器禁止条約の実効性の課題を整理し、NPT体制の下で核兵器国に少しずつ核軍縮への政治的压力をかける漸進的アプローチこそが核廃絶への唯一の道だと論じる。

揺らぐ核抑止思想 アプローチは



核兵器禁止条約は日本を守れるか

「新しい現実」への正念場
佐野利男・著
信山社／2200円

市民は「ともに社会を発展させる協働のパートナー」。長い戒厳令時代を経て開花した、台湾の民主主義を貫く姿勢だ。オーデリー・タン氏が力を入れてきた政策提言サイトでは、投稿された政策アイデアが一ヶ月以内に五〇〇〇以上の賛同を集めたら行政が対処する。官民協働は日本でも長年議論されてきたが、行政と市民が対等に議論し、理解し合う台湾の事例に学ぶことは多い。民主主義が脅威にさらされる今だから読みたい一冊だ。



台湾がめざす民主主義
強権中国への対立軸
石田耕一郎・著
大月書店／1980円

民主主義は「協働」から 台湾に思想と手法を学ぶ

「人種」は生得的なもので、その本質的な性質に基づく実体としては存在しない。異なる集団に向ける差別的なまなざしが逆説的に「人種」を作り出してきたことを著者は明らかにする。各時代によって変遷してきた人種は何を指し、何を意味してきたのか。本書は、フランス植民地支配史研究者が、主にヨーロッパに焦点を置き、レイシズム＝人種主義が植民地支配やナショナリズムと結びついて人種差別を生み出してきた歴史を紐解く。

「人種」に根拠はなく 差別・排除の道具だつた



人種主義の歴史
平野千果子・著
岩波新書／1034円

フランスは、アルジェリアにおける植民地支配や独立戦争での加害の記憶に長く沈黙してきたが、一九九〇年代以降は承認するようになつた——。この方針転換は和解や共生への前進に見える。だが、その政策的背景や博物館などでの言説を分析した本書は、移民統合と国民的結合を促進する目的に都合よく記憶が取捨選択されてきたという限界を示し、未来のために過去の暴力をいかに直視すべきかという問いを投げかけている。

旧植民地を記憶する
フランス政府による〈アルジェリアの記憶〉
の承認をめぐる政治
大嶋えりこ・著
吉田書店／4400円

何を「記憶」にするのか それ自体が政治的問題

西洋各国の学問が流入した幕末から明治初期の日本において、オランダの法学・政治理論の受容はいかなる意義を持ったのか。本書は西周、津田真道、小野梓らの思想と政治構想を精緻に分析し、近代日本の形成過程に蘭学が与えた理論的影响を明らかにする。政治思想史研究からグローバルな知性史研究へと、新たな地平が開かれた一冊。特に、第三章の権力政治と国際法をめぐる当時の議論が、動揺する現在の国際秩序へ示唆を与える。

**近代日本の政治構想と
オランダ**^{増補新装版}
大久保健晴・著
東京大学出版会／8250円



近代日本の盲点「蘭学」 その受容の実際を探る